

【予稿集】

歩かない散歩と建物のない館
—文学散歩・文学館・文学選集—

岡野 裕行
皇學館大学文学部国文学科
h-okano@kogakkan-u.ac.jp

特定のテーマに従って複数の作家の代表作を集めた文学選集（作品集・文学全集・文学体系・アンソロジー）と呼ばれる書物群がある。それらのタイトルやシリーズ名の名付け方を調べると、文学散歩や文学館などの用語を用いるというような奇をてらったものも確認できる。それらは実際にはまちを歩かない散歩であり、実在の建物や空間を有していない館である。文学作家ゆかりの地を訪ねて見聞する文学散歩や、文学アーカイブ機関としての文学館のイメージを借用することで、文学選集の編集過程や読者が文学作品を読むという行為に対し、思索と逍遙の意味を重ね合わせようとしている。

**A Walk without Walking and a Building without Structures
- Literary Walks, Literary Museums, and Literary Anthologies -**

Hiroyuki OKANO

Department of Japanese Literature, Faculty of Letters, Kogakkan University

1. はじめに

文学選集という出版物のタイトルには、一般に作品集・文学全集・文学体系・アンソロジーなどの名称がつけられる。戦前には、改造社『現代日本文学全集』（1926-1931年）や新潮社『世界文学全集』（1927-1930年）などの円本が刊行されていた。戦後になると、角川書店『昭和文学全集』（1952-1955年）、筑摩書房『現代日本文学全集』（1953-1959年）、河出書房新社『世界文学全集（グリーン版）』（1959-1966年）なども登場する[1]。

ところが全体からすれば少数ではあるが、こうした文学選集の名称において、文学散歩や文学館などの奇をてらったような出版物も確認することができる。文学散歩や文学館という用語が世の中に定着したのはいずれも戦後になってからであるため、文学選集のタイトルとしてそれらが用いられるのは比較的新しい使用法と言えるだろう。

本発表では、文学選集のタイトルに見られる文学散歩や文学館などの事例を取り上げることで、出版文化に見られる名称付与の特徴を考察する。

2. 文学散歩

2.1 文学散歩のはじまり

文学散歩という用語は、詩人・編集者の野田宇太郎（1909-1984年）が1950年末に考案したものであることが知られている[2]。具体的には、『日本読書新聞』紙上の連載「新東京文学散歩」と、その内容を書籍化した1951年の『新東京文学散歩』（日本読書新聞）がその出発点となっている。

野田はその後、文学散歩に関連する出版活動を晩年に至るまで続けることで、その取組みの普及と確立に奔走する。以下に示す作品は、すべて野田が著者または編者となっているものである。

- (1) 『新東京文学散歩』日本読書新聞, 1951
- (2) 『新東京文学散歩 増補訂正版』角川書店（角川文庫）, 1952
- (3) 『新東京文学散歩 続篇』角川書店（角川文庫）, 1953
- (4) 『九州文学散歩 正篇・続篇』創元社, 1953-1954
- (5) 『アルバム東京文学散歩』創元社, 1954
- (6) 『東京文学散歩の手帖』的場書房, 1954

- (7) 『東京文学散歩 下町篇・山の手篇』角川書店 (角川写真文庫), 1955
- (8) 『東京文学散歩の手帖』学風書院, 1955
- (9) 『九州文学散歩』角川書店 (角川文庫), 1955
- (10) 『湘南伊豆文学散歩』英宝社, 1955
- (11) 『関西文学散歩』全3巻, 小山書店, 1957
- (12) 『四国文学散歩 愛媛』小山書店新社, 1958
- (13) 『東京文学散歩』全6巻, 小山書店新社, 1958-1959 ※第4-6巻は未刊
- (14) 『関西文学散歩 普及版』全3巻, 小山書店, 1959
- (15) 『定本文学散歩全集』全13巻, 雪華社, 1960
- (16) 雑誌『文学散歩』全25巻, 雪華社, 1961-1964
- (17) 『東海文学散歩』全6巻, 日研出版, 1964-1965 ※第3-6巻は未刊
- (18) 『信濃路文学散歩』雪華社, 1968
- (19) 『定本九州文学散歩 正篇・続篇』雪華社, 1968
- (20) 『掌篇文学散歩 東京篇』毎日新聞社, 1970
- (21) 『改稿東京文学散歩』山と溪谷社, 1971
- (22) 『野田宇太郎文学散歩』全28巻, 文一総合出版, 1977-1985 ※第15-16巻は未刊
- (23) 『東京ハイカラ散歩』角川春樹事務所 (ランティエ叢書), 1998 ※(1)の改題作
- (24) 『新東京文学散歩: 上野から麻布まで』講談社 (講談社文芸文庫), 2015
- (25) 『新東京文学散歩: 漱石・一葉・荷風など』講談社 (講談社文芸文庫), 2015

野田が考案した文学散歩という用語は, その使い勝手の良さゆえか, それをタイトルに用いた模倣的書物が次々と刊行されるようになる[3]. まちなかに点在する文学情報 (文学館・生家・文学碑・作品舞台など) を実際に巡り歩き, 読者に対してそれを案内するような関連図書の増加傾向からは, 文学散歩という取組みが考案者の野田の手を離れ始めたことでより一般化し, 誰もが気軽に活用できるような手法として洗練されたことがわかる.

2.2 文学選集における文学散歩の用例

文学選集のなかには, 内容的には一般的なアンソロジーやエッセイ集というものでありながら,

文学散歩という用語を用いているものが散見される. これは考案者の野田が当初用いていた言葉の用法とは, 異なる形式が生み出されたということの意味するだろう. 以下にいくつかの事例を示す.

- (1) VOI 研究室編『性風俗の文学散歩』緑園書房, 1957
- (2) 幸尾保之『電話文学散歩』東京出版センター, 1967
- (3) 吉行淳之介『猫背の文学散歩: 吉行淳之介対談集』潮出版社, 1974
- (4) 熊井明子『猫の文学散歩』集英社, 1980
- (5) 槌田満文『室内文学散歩』未来工房, 1981
- (6) 赤塚不二夫『赤塚不二夫の文学散歩』リイド社, 1984
- (7) 大河内昭爾『味覚の文学散歩』講談社 (講談社文庫), 1985

以上の一覧からわかるように, 野田が文学散歩という用語を考案してその普及が進んで以降, まちを歩かない文学散歩の関連図書もさまざまなテーマのもとに刊行されてきたことが確認できる.

3. 文学館

3.1 文学館のはじまり

日本における文学館の歴史は, 1962年設立の日本近代文学館 (開館は1967年) に始まる[4]. 日本近代文学館はそもそも文学館という用語を史上初めて用いた機関でもあり, 同館の存在が文学館という用語の確立と普及に寄与している. 石川近代文学館 (1968年), 俳句文学館 (1976年), 小樽文学館 (1978年), 神奈川近代文学館 (1982年), 日本現代詩歌文学館 (1984年), 大阪府立国際児童文学館 (1984年), 鎌倉文学館 (1985年) などがそれに続いたことで, 文学館という文学資料アーカイブ機関が世の中に確立していくことになる.

3.2 文学選集における文学館の用例

3.2.1 日本近代文学館の複製シリーズ

文学館という用語を文学選集のタイトルやシリーズ名に用いた出版物として, 日本近代文学館とほるぷ出版による複製シリーズ『名著複製全集近

代文学館』は特に大きな注目を浴びた事例である。

- (1) 『名著複刻全集近代文学館：明治後期』1968
- (2) 『名著複刻全集近代文学館：明治前期』1968
- (3) 『名著複刻全集近代文学館：大正期』1969
- (4) 『名著複刻全集近代文学館：昭和期』1969
- (5) 『新選名著複刻全集近代文学館』1970
- (6) 『特選名著複刻全集近代文学館』1971
- (7) 『精選名著複刻全集近代文学館』1972
- (8) 『名著複刻漱石文学館』1975
- (9) 『名著複刻芥川龍之介文学館』1977
- (10) 『名著複刻詩歌文学館：連翹セット』1980
- (11) 『名著複刻詩歌文学館：山茶花セット』1980
- (12) 『名著複刻詩歌文学館：石楠花セット』1981
- (13) 『名著複刻詩歌文学館：紫陽花セット』1983
- (14) 『名著複刻漱石小説文学館』1984
- (15) 『秀選名著複刻全集近代文学館』1984
- (16) 『名著初版本複刻太宰治文学館』1992

以上のように、明治前期・明治後期・大正期・昭和期の複刻全集を皮切りとして、それらの再刊において収録作品を選び直した新選・特選・精選・秀選という各シリーズのほか、漱石・芥川・太宰といった個人作家や詩歌作品をテーマとしたものなど、いずれも初版本どおりの装幀で揃えるという趣旨で続けざまに出版されてきたことがわかる。

3.2.2 シリーズ名としての文学館

文学館という用語をシリーズ名に含めた出版物には、前述した日本近代文学館の複刻全集を除くと、以下に示すものが確認できる（いずれも出版者・シリーズ名・出版年の順に記載している）。

- (1) 文藝春秋『現代日本文学館』1966-1969
- (2) ほるぷ出版『日本児童文学館：名著複刻』1971
- (3) 日本古典文学刊行会『複刻日本古典文学館』1971-1975
- (4) 筑摩書房『ちくま少年文学館』1971-1978
- (5) ほるぷ出版『日本名作自選文学館』1972-1974
- (6) 立風書房『世界青春文学館』1973
- (7) 立風書房『日本青春文学館』1973
- (8) ほるぷ出版『日本児童文学館：名著複刻：第2集』1974

- (9) ほるぷ出版『複刻日本古典文学館』1976-1985
- (10) ポプラ社『こども文学館』1977-1987
- (11) むぶん児童図書出版『心の児童文学館シリーズ』1977-1998
- (12) ほるぷ出版『小林多喜二文学館』1980-1983
- (13) むぶん児童図書出版『たのしい心の児童文学館シリーズ』1981-1993
- (14) くもん出版『くもんのユーモア文学館』1984-1992
- (15) 国書刊行会『熱血少年文学館』1985
- (16) 講談社『少年少女日本文学館』1985-1988
- (17) 講談社『少年少女伝記文学館』1987-1991
- (18) 佼成出版社『いちご文学館』1988-1992
- (19) ポプラ社『新・こども文学館』1988-2004
- (20) くもん出版『幻想文学館』1989
- (21) 筑摩書房『澁澤龍彦文学館』1990-1993
- (22) くもん出版『くもんのまんが古典文学館』1990-1994
- (23) 文溪堂『ぶんけい創作児童文学館』1991-1993
- (24) ぎょうせい『ふるさと文学館』1993-1995
- (25) 出版芸術社『ふしぎ文学館』1993-2014
- (26) 段々社『アジア文学館』1993-2019
- (27) 新日本出版社『新日本ジュニア文学館』1994-1996
- (28) ポプラ社『ジュニア文学館』1994-1998
- (29) 岩崎書店『創作児童文学館』1994-2000
- (30) 早川書房『夢の文学館』1995
- (31) 日本図書センター『子ども文学館』1995
- (32) 講談社『ポケット日本文学館』1995
- (33) ダイナミックセラーズ出版『昭和禁書官能文学館』1995-1996
- (34) 講談社『大衆文学館』1995-1997
- (35) 新潮社『芹沢光治良文学館』1995-1997
- (36) 金の星社『ときめき文学館』1995-1999
- (37) フランス書院『禁秘文学館』1996-1998
- (38) ポプラ社『ミステリー&ホラー文学館』1996-2005
- (39) 出版芸術社『ふしぎ文学館 special』1996
- (40) 日本文芸社『秘本文学館』1997-1998
- (41) 日本図書センター『「心」の子ども文学館：

今を生きる』1997

- (42) 日本図書センター『「心」の子ども文学館：歴史を旅する』1998
- (43) 本の友社『まぼろし文学館：大正篇』1998
- (44) 汐文社『井上ひさしジュニア文学館』1998-1999
- (45) 新日本出版社『風の文学館』1998-2004
- (46) 汐文社『住井すゑジュニア文学館』1999
- (47) ベストセラーズ『発禁文学館』1999-2000
- (48) 筑摩書房『猟奇文学館』2000-2001
- (49) 潮出版社『ヴィクトル・ユゴー文学館』2000-2001
- (50) 汐文社『シェイクスピア・ジュニア文学館』2001-2002
- (51) フランス書院『官能文学館』2002-2003
- (52) 日本図書センター『太宰治文学館』2002
- (53) 学習研究社『芥川龍之介妖怪文学館』2002
- (54) 郷土出版社『信州・こども文学館』2002
- (55) 新日本出版社『緑の文学館』2004-2007
- (56) 日本民主主義文学会『民主文学館』2004-2022
- (57) 講談社『21世紀版少年少女日本文学館』2009
- (58) 講談社『21世紀版少年少女古典文学館』2009-2010
- (59) 講談社『21世紀版少年少女世界文学館』2010-2011
- (60) 学研教育出版『ティーンズ文学館』2010-2021
- (61) 学研プラス『キッズ文学館』2012-2022
- (62) 樹立社『中国少年文学館』2020-2021

3.2.3 ちくま文庫オリジナルの文学館シリーズ

筑摩書房は編者に和田博文を迎え、タイトルに文学館を掲げた文学作品のアンソロジーを、ちくま文庫オリジナルとして2017年から順次刊行を続けている。以下に示す作品群は、いずれも和田が編者となっているものである。

- (1)『猫の文学館 1:世界は今,猫のものになる』2017
- (2)『猫の文学館 2:この世界の境界を越える猫』2017
- (3)『星の文学館:銀河も彗星も』2018
- (4)『月の文学館:月の人の一人とならむ』2018
- (5)『森の文学館:緑の記憶の物語』2020
- (6)『石の文学館:鉱物の眠り,砂の思考』2021

3.2.4 文学賞の名称に見られる文学館

図書の形態による文学選集ではないが、公益財団法人メトロ文化財団が年2回募集し、その受賞作を中吊り広告に掲げる「メトロ文学館」事業にも、文学館という用語の活用事例が見られる[5]。

4. まとめ

文学選集のタイトルやシリーズ名は、一般に用いられる文学全集・作品集・アンソロジーなどの名称を用いたほうが実際の内容に即しており、読者にとってわかりやすくなる。しかし、文学作家ゆかりの地を訪ねる文学散歩や文学アーカイブ機関としての文学館の言葉のイメージを借用することで、文学選集の編集や読者が文学作品を読むという行為に対して思索と逍遥の意味を重ね合わせられるため、その編者や出版者はあえて奇をてらったような名付けをしているものと考えられる。

注・文献

- [1] 文学全集が盛んに出版されていた二十世紀半ば(1953年から1978年)の四半世紀の出版動向を、田坂は「文学全集の時代」と呼んでいる。田坂憲二。“序章”. 文学全集の黄金時代:河出書房の1960年代. 和泉書院, 2007, p.1-5.
- [2] 岡野裕行. 三つの文学散歩:野田宇太郎からウィキペディアタウンへ. 日本近代文学. vol.106, 2022, p.160-175.
- [3] それら他者の出版物について、野田は「題名盗用」「模倣的書物」といった言葉で批判的に論じているように、自分の著作以外に文学散歩という用語が使用されることを強く嫌っていた。野田宇太郎。“文学散歩”. 日本近代文学大事典第4巻. 日本近代文学館編, 講談社, 1977, p.461.
- [4] 岡野裕行。“内なるMLA連携:日本近代文学館”. デジタル文化資源の活用:地域の記憶とアーカイブ. 知的資源イニシアティブ編, 勉誠出版, 2011, p.103-113.
- [5] 公益財団法人メトロ文化財団. メトロ文学館. https://www.metrocf.or.jp/jigyoku/culture_bungaku/ (最終確認 2022-05-30).